

「文明の交差点における歴史の現在」報告要旨

桜間瑛(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

本格的な冬の厳しさが感じられる新潟で、「ユーラシア地域大国における聖地の研究」第1回研究会が開催された。筆者は、これまでの「世界遺産研究」シリーズには関与していなかったが、ヴォルガ地域調査旅行の縁で国立民族学博物館の杉本良男先生よりお声掛けいただき、この度報告する機会を頂いた。

私はこれまでロシア連邦タタールスタン共和国を対象として研究を行ってきた。この共和国内では、カザン・クレムリンが2000年から世界遺産に認定されており、現在ボルガル遺跡、スヴィヤシスク島の世界遺産認定のための申請が行われている。本報告では、これらの遺跡の成立過程を追ったうえで、現在これらの遺跡に期待されている役割と、共和国の公式なイデオロギーとの関係、それに対する異論などについて検討を行った。

タタールスタン共和国は、その人口の半数強をムスリムが占めており、大多数がロシア正教徒であるロシア連邦内において、注目すべき地域となっている。特にコーカサス地域と比べると、比較的穏健なムスリムが住む地域として、多民族・多宗教の共存を達成していることが、共和国の公式な言説においては強調されている。その象徴とされているのがカザン・クレムリンであり、その敷地内にはロシア正教会の聖堂とイスラームのモスクが並存している。世界遺産としての認定に当たっても、この文化・宗教の共存がアピールポイントとなった。また、ボルガル遺跡は古代ブルガール国家の首都であり、イスラームを最初に受容した場所として、タタールにとっての一種の聖地をなしている。一方、スヴィヤシスク島は、帝政期以来この地域のロシア正教の重要な修道院が置かれたことで、ロシア正教徒にとって重要な場所となっている。現在、共和国の前大統領 M.シャイミエフによって行われている両史跡の再建・再開発事業、及び世界遺産同時登録の試みは、やはりイスラーム・ロシア正教双方を尊重していることを示す狙いがはっきりと表れている。

しかし、これらの復興事業については批判の声も多い。カザン・クレムリンに関しては、モスクの事実上の新築が行われたことに関して、ロシア人から批判の声が上がっているほか、その外観がヨーロッパ的すぎるとしてタタールからも批判の声が起こっている。ボルガル遺跡・スヴィヤシスク島の再開発事業については、聖地を観光目的で開発することに対する批判も聞かれる。さらにボルガル遺跡については、そこで行われている巡礼や祈祷が正しいイスラームであるのかといった議論があり、スヴィヤシスク遺跡については、帝政期の改宗政策の中心をわざわざ復興させることへの批判が根強い。これは、タタールスタン共和国が、その多民族・多宗教の共存という理念を、具現化させようとしているがために、かえってその実現の困難を示しているということができる。

これらの遺跡、特にカザン・クレムリンのモスク建設は、世界遺産という制度において、「真正性」という問題がいかに理解されているのかを考察する上で重要な事例を提供している。また、それぞれが宗教的な意味も有しており、特にボルガルへのムスリムの巡礼についても、さらに研究を行う余地が大いにある。本研究会での議論を通じて、中国やインドにおける事例とも、比較・参照しながら、研究を続けていく可能性が見えてきた。今後は、さらにこれら史跡についての知見を深めつつ、他地域における事例も比較・参照しながら研究を進めていきたい。

最後になったが、改めてこのような貴重な機会を下さった杉本先生、研究会の中で多くの助言を下さった参加者の方々、そしてこの研究会を新学術領域として後援してくださった望月哲男先生にお礼を申し上げたい。ありがとうございました。